

## 「42年前の選択といま」

2004/11/16

中島義雄

### 1、はじめに

自己紹介からはじめます。

皆さんは中島の反面だけしかご存じない部分があります。それは長崎に出てくる前の中島でしょう。高校まで故郷川棚で過ごしました。長崎郵便局へ出てきて働き始めて、労組活動家として42年間の時間がたちました。すごく長い時間ですが、まさにあっという間でした。それは故郷に残してきた私の故郷の家族問題があったからです。私の子供たちは今も「父は退職したら必ず川棚へ帰るだろう」と言っているようですが。私の子供はみな成人し別居しております。

私は川棚に父母と5人の兄弟がいました。末っ子です。父母、長女は死去しまして、兄弟4人が残っています。私たち家族の最大のテーマは、家族が団結して生きることでした。母は若いころ病気で失明し、全盲で、一人では外へ出かけることができません。私の小さいころからの日課は母に新聞を読んで聞かせることでした。そして学校から帰ると、晩御飯の食材を買い物に行き、10本の針に糸を通して、遊びに出かけることが条件でした。遊び心がつくと、友達に置いてきぼりを食らいたくなく、家に帰らないままの放課後になり、いつしか外向きの性格になったようです。

さらに兄と、次女も40歳代ころから失明し、現在全盲です。覚えきれない複雑な名前難病で、直る手立てはないと診断されています。一言で言えば、目の血管が死滅する病気です。また、長女と三女が重いリュウマチでした。長女は52歳で死亡しましたが、三女は何度も手術を繰り返し、人工関節でなんとか動ける状態ですが、障害者1級です。それぞれ独居老人です。だから4名の家族の中で、言うところの健常者は私だけです。もうこの状態が20数年間続いています。今も月に一度は、一人住まいの姉たちがいる川棚や大村に帰り、姉たちの雑事を手伝っています。病院、銀行、郵便局、役場、スーパー、大工仕事などです。現在私の身の振り方は未定ですが、一応組合の要望もあり、再任用試験を受験するつもりです。ともあれ私が退職し、暇になったら姉たちを温泉に連れて行くと約束しています。

### 2、みんな生きている

障害者という言葉は日本語ですが、日本の社会では害を他に与えるという意味にも取れます。社会の邪魔な存在という意識です。この前もテレビで、「自分でろくに動けないやつが、一人前の権利面して外を出歩くな。邪魔なんだよ」といい放つ場面がありました。これです。私はこの言葉と終生対峙して行くという気持ちが、強くあります。「五体満足で生まれてよかった」という言葉も嫌いです。今は障害ではなく、ハンディと呼ぶ人もいますが、少数派です。使い分けは自由ですが、大事なのは言葉ではなく、意識なのです。人はいろんなハンディを抱えています。差、ギャップ、不足など、いろんな言葉と状態がありますが、目が見えなくとも、口がきけなくとも、知的ハンディの人でも人は生きています。生きている限り、物理的にも精神的にも殺されたくはありません。生きていく権利などと大乘段に構えるつもりはありませんが、誰でも死にたくはないのです。小さな一個の命、一人に一個与えられた命。これを大

事にする人生、感覚が、社会を強くやさしく変えるのだと思います。家族の周りが全部障害者でも、私はその気持ちになかなか理解できません。それは私とそのハンディを背負っていないからです。障害問題は身近に感じますが、この5名の母、兄、姉たちの一生はどんなものだったのだろうと、思いをはせるとき、鉛のような重い気持ちが胸に去来します。といっても、彼ら、彼女らは、障害の重い現実を他人に愚痴ることはありません。それが障害者に優しくない現代社会を何とか生きていく自己防衛のすべてなのです。私は普通に付き合っていきますが、明るく、話すしかありませんね。社会的弱者の視点。これが私の原点、出発点です。

### 3、42年前の決断

そして、現在です。大志を胸に抱き故郷を出て、郵政大学に合格し、郵便局長になり、田舎の家族を安心させるはずの人生が、どうして労組活動家という親兄弟の期待にはずれ、横道にそれてしまったのかという点です。これが本題です。

1963年春、長崎郵便局に入り、小松寮に若い身を投じました。いろんな人がいました。一番は、福岡の中等部で研修所を一年過ごした人の存在でした。これは集配課でただ平凡に過ごす私の毎日と比べて、大変刺激的でした。まさに一ランク上で学び、社会や職場、組合を見ることのできるすばらしさは彼らから学びました。

そのころ、私が読んだ(読まされた)本は、もちろん、「ものの見方、考え方」というものでした。当然労働者としてのものという副題がつきます。社会には矛盾があり、その対立が発展し、社会が変わっていくという歴史観です。その一番が、現代は資本主義の時代であり、労働者と資本家があり、その利害は根本から対立するという矛盾の問題です。典型は賃金に現れます。賃労働と資本なのです。これが労資協調を否定する私の価値観を終生持つことになります。周りから見ると変わらないことは間違いに見えるかもしれませんが、これは普遍です。別の言い方をすれば、労働者として生きるもう一つの価値観を持つことです。職員としてだけ生きることではないという価値観です。

私が読んだ本で記憶があるのは、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」でした。今も岩波から出ていると思いますが、中学2年のコペル君への話しかけの本です。これが原点です。

もうひとつは、河出書房から出ている「マルクスの共産党宣言」です。当時の値段で450円です。2万円の賃金の時代です。現在が20万円とすれば、4500円もします。高い本でした。値段はともかく、中身です。これらの本を読むたびに、目からうろこが落ちるとはまさにこのことでした。まさに人生が変わったのです。「すべてこれまでの歴史は、階級闘争の歴史である」で始まるプロレタリア時代の到来予告に感動しました。学校では習わなかった歴史だったのです。そして「大工業の発展で、全社会は敵対する2大陣営(労資)にはっきりと分かれていく。なによりもまず、ブルジョアジーは彼ら自身の墓堀人を作り出す。ブルジョアジーの没落とプロレタリアートの勝利はともにさけられない」という言葉で結ぶ宣言本です。階級闘争だとか唯物史観とか、初めてきく言葉とももの見方に、別の人生もあるのだ！と感じたものでした。

多くのすばらしい先輩たちに学びながらも、なぜか私はこの中等部を受験しませんでした。本音は力がなかったからですが、理屈を言えば、それは社会がその仕組みを含めて打ち壊す時代として始まり、私の意識がそのほうに向いたからです。時は1960

年代後半に入り、パリの5月から新しい風が世界的に吹き始め、社会変革・革命の時代が到来してきたのです。社会は大学闘争真っ盛り、ベトナム反戦や社会主義国家の矛盾も含め、当時の社会党、共産党、そして総評、全通も含めて、矛盾の渦中にあり、保守反動に見え、新しい左翼の時代到来を待つ政治闘争の季節が始まりました。

#### 4、闘いで成長する

私に第2の選択肢を与えたのは1969年全通長崎中央支部の反マル生・労働政策変更闘争「150日闘争」でした。労組が職場だけでなく、社会に出て、政治的な課題と連動し、政治組織と意思を共有し、一緒に革命を起こそうという運動が、確かにあると私の目には見えたのです。私はこれにかけようと思いました。これが正しいという実感です。

全通の権利闘争としては長崎中郵のそれは異質でした。まさに力こそ正義。破壊こそ力の論理で、実力闘争が前面に出たものでした。そして当時「免職は勲章」という意識でした。先を争い処分を受けるという風潮で、逮捕や免職は驚きではなかったのです。時代の波でした。なにせ、佐世保では5万人が集まり、原子力空母入港阻止で激突が起こり、白兵戦さながらの闘いです。ストライキも平気で、東大の入学試験が中止される高揚した時間でした。まさに国家の威信と存在が揺れるときだったのです。郵便局でも機械搬入阻止闘争で福岡中郵に九州各地から全通労働者2千人が夜半集まり、局を埋め尽くし、中庭で火をたき、機動隊と対峙する時代だったのです。当時一年間で36名の人が免職になっています。1960年から70年代、まさに社会主義思想と国家の高揚があり、まさに革命を信じないものは反動とでもいう流れでした。文字通り、労働者は闘いで成長します。私は1969年の夏に完全に生まれ変わったのです。まさに第二の誕生でした。

#### 5、総評と社会主義の敗北

さらに時代が過ぎ、1975年スト権スト。1978年反マル生越年闘争と動き、1979年4・28へと流れます。力の対決の時代に敗れ、総評運動に敗走が始まります。一番大きな理由は、自由主義が持ちこたえ、社会主義が敗北したことです。資本家が生き残ったのです。80年代、世界が反動に動きます。新保守主義の台頭です。社会主義国家と自由主義国家の中の社会主義者を狙う敵の攻撃でした。西欧の労組はもともと社会主義的(資本家を認めず革命をする)ではなく、社会民主主義(資本家を認め改良する)の影響下でしたので、東欧の社会主義の敗北もあまり受けず、軟着陸します。しかし日本の総評は、特殊社民型=社会主義労組とでも言うべき、社会主義の影響を強く受けています。日本で言えば本来の社民党は民主党でした。これは同盟系で、もともと異質な関係だったのです。

国鉄改革と総評解体は、新保守主義と同盟系労組の連動で起きた攻撃で、総評は1989年解体します。多くの総評型労組も変身します。これが連合型の現在の姿です。だから連合は資本主義=自由主義と資本家を認める労組で、労使の階級対立を認めません。労資運命共同体で、協調して国家と資本家、企業を守るというのが原点です。だから企業や国家が危機だといえ、明日が見えません。自分も危機的状態に陥るのです。一緒に外的と戦おうとなり、排外主義、国家主義になるのです。これはイラク戦争などにもつながります。

ところで、なぜ総評運動は敗北したのか。一番は、総評型労働運動でいくという意

識の労働者が負けたからです。これではこんにやく問答ですが、1956年ソビエトでスターリン批判がおき、社会主義はおかしいのではないかという論争が起こります。そして、1960年代チェコでプラハの春がおき、ソビエトの軍隊が東欧諸国を武力侵攻します。社会主義は同じという意識ですから、武力支配ではなく、その国社会主義政権の応援という形でした。しかし、その東欧諸国の国民はこれに反対しました。自由な国家、自由な国民という選択肢が起きたのです。圧制の社会主義というイメージが一気に広まり、80年代東欧社会主義国家の敗退、自由主義国家への流れが起き、ついに91年ソビエトそのものが倒れます。

その意味では社会主義型の総評運動も労組も倒れる運命にあったのでしょう。さらに職場では、反合理化闘争という基本形がありました。今も私たちはその強い影響下にあります。企業や資本化が効率化という名前で行う改革は、資本家の更なる儲けのための手段で(これは搾取と呼びますが)、反対するのが正しいという位置づけです。だから何でも当局が行う施策には反対というがんじがらめの意識があったのです。効率化政策には面従腹背=サボタージュが日常でした。これが、資本家や企業経営者、そして同盟系の労組には「企業破壊運動」というわかりやすい批判の標的になり、資本の側に取り込まれたのです。そして、大労組中心の総評型社会主義的労働運動は敗退したのです。日本的な人の発想方法、画一化と集団主義、人と違った個人を認めない、という論理が根本です。個性を異質=悪とする古い封建社会の流れが、平成の現代に国家主義を復活再生しているのです。

## 6、道に迷ったら原点に戻る

時代が変わった今、これらと対決するためには、なにがあるのでしょうか。私は、迷ったり、困ったときには原点に戻るということをテーマに生きています。そのとき、この共産党宣言の本に帰ります。私はこの本の余白部分に、いろんなことをその時々の中で落書き的に書き加えています。

- 1、 1967/8/6 活動を支えるのは思考である。思考とは見る、知ることである。  
(結婚した年で生活環境が変わったと思えるころ)
- 2、 1973/6/17 改めて問う。思想とは破壊され、再構築される過程にある。  
(一度挫折し、立ち直ろうとしていることだと思う)
- 3、 1990/3/18 道が二つに分かれたら、出発点に戻ることだ。なぜ自分がこの道を歩もうと決めたのかを確かめることだ。(総評解体で独立労組結成を決めたころ)
- 4、 1992/4/21 なぜかと問えば、社会主義ソビエトが敗北したからだ。階級闘争において反革命は存在する。しかし大事なことは、「社会的・経済的環境が人の意識を決定する」というマルクスの唯物史観の定式に従う論理でも、ソ連の労働者が自由主義経済を選択したことの意味は大きい。もう一度、賃労働と資本を学ぼう。(ソビエト解体のあと)

別に改めて読むわけではありませんが、流し読みにしても意識が洗われます。有名な社会主義の学者が毎年元旦にこの共産党宣言を読むと語っていましたが、そこまでは固まっていますが、苦しいときの何とかです。いまだき流行りませんが、ものの考え方です。

## 7、時代の変遷

時代は変わりましたが、社会を形作る経済体制は私が運動を始めたころのままです。今も階級社会であり、資本家と労働者に対立があるという原点は変わっていません。経済体制が政治体制を決め、人々の意識を決める。今はそこにあります。資本家が出て、富むものはいっそう富み、貧しいものはさらに貧しくなる歴史は強くなってきています。新保守主義はアメリカに典型ですが、ブッシュの減税は富裕層の減税で、貧しい層には増税になります。日本の消費税のアップはこの典型です。日本でも財政の自己責任化が始まります。社会が個人を助ける法律から、個人が社会を支える法律に変わっているのです。これが新保守主義です。日本の国家財政は 700 兆円の赤字で、破綻しています。年間予算の 10 年分が先食いされているのです。この原因は支出を別として、みんなが財政を支えていないからです。稼いだ分に応じて、財政負担をするという原則でいけば、支出を別にして応分負担ですから納得するはずですが、日本では所得が上がれば税負担も高くなるという方式でしたが、これが上にやさしくなってきました。これが収入減の原因です。今高齢化社会で年金支出が財政を破綻させると盛んに宣伝されていますが、日本社会がこの 40 年間、身の丈を知らずに走りすぎ、借金を積み重ねてきた結果の財政破綻で、高齢者の年金だけが理由ではないのです。今は、社会的経済的な弱者が過保護で応分負担をしていないから、これを是正するといっていますが、なにかが間違っています。あくまで一例ですが。

新保守主義は競争論理です。走った人が先に豊かになる権利を持つ。これです。自分だけ生き残ろうとして、自分だけ走ることができる人は生き残れるでしょう。しかし、新潟地震でもそうだったように、社会の根本が大きく揺れるときは、社会的弱者は取り残されるのです。生き残れません。取り残されるしかないのです。中島の歴史観から言うと、私は兄、姉たちを見捨てることになり、私は認めません。それこそ、何のために 42 年間戦ってきたのかと自問自答します。

資本家や連合労組は「がんばれば夢があり、明日は明るくなる」と新保守主義の時代を謳歌的に語りますが、貧富の格差が拡大している現実は事実です。私も今日がんばれば明日はよくなると思って闘ってきましたが、私の在職中には希望はかないませんでした。それどころか、がんばればがんばるほど、明日は泥沼的に深みにはまるというのが実感です。その意味では今の仕組みは間違っているという 42 年前の決断を大事にして生きていきたいと思います。

## 8、終わりに

また現代は労組活動家といっても、社会的にはなんの尊敬も評価も受けない時代になりました。労組は特権階級で、自分の利益だけをエゴ的に守ろうとしているとの批判も強く受けます。ユニオンもまさに本工主義の労組です。油断をすると、社会的に打倒される存在です。それを克服するためには、自分が常に学び、なにか社会的な正義なのかを問い続けることが必要です。組織にあぐらをかいてはなりません。

15 年前の全労協への選択は当時としては正しかったのですが、それは 15 年前のことで、今は大きく流れも変わっています。国鉄闘争でそうであるように、全労協といっても許されるものではないのです。生き方の問題ですが、日々、研鑽し、自分の外と交流し、道を誤らないように、努力されるように希望します。

今日はありがとうございました。